

第 25 回日本看護管理学会学術集会 インフォメーション・エクステンジ報告

日時：2021 年 8 月 29 日(日)10:10～11:10

場所：パシフィコ横浜ノース IE 会場 2 LIVE 配信

テーマ：認定看護管理者によるタスクシフト・タスクシェアとは
—新型コロナウイルス感染症拡大の中での新たな課題—

I. 目的

看護師から他職種へタスクシフト・タスクシェアの推進に取り組む中で新型コロナウイルス感染症の拡大という新たな環境変化に対し、どのようなマネジメントが必要なのかを検討する。

II. 話題提供者

1. 岩手医科大学付属病院 副院長・看護部長 佐藤悦子氏
「コロナ禍の中、医療の質を維持するための看護職間支援の実際」
2. 社会医療法人帰巖会みえ病院 看護部長 甲斐清美氏
「看護職員の負担軽減への取り組み」

III. 参加人数(最大) 138 人(理事・役員、話題提供者含む)

IV. 内容

認定看護管理者会佐藤美子会長からあいさつの後、福地洋子副会長、長田佳予子副会長の座長のもと 2 名の認定看護管理者である話題提供者から情報提供を得た。佐藤氏からは、病床数 1,000 床の県内唯一の大学病院で新型コロナウイルス感染症対応のため一般病棟の看護職員が通常より人員配置が不足している状況が続いていた。その中、限りある人員で複雑化・業務負担をカバーし合う関係性が成立した 2 点の取り組みが紹介された。1 点目は 24 時間リリーフ体制による補完、2 点目は急変回避 RRT・RRS(コードイエロー)の早期介入である。高度急性期病院としての機能を果たし質の維持を図るという強い使命感を持った活動の紹介。甲斐氏からは、病床数 110 床の病院で勤務医及び看護職員の負担軽減や処遇の改善等を整えるために多職種の構成員が参加する月に 1 回の役割分担推進会議が設置され、改善計画が立てられ実施評価を重ね看護職員の離職率は 19.6%から 3%まで改善された。その中、新型コロナウイルス感染症対応で陽性者以外の受け入れ・宿泊療養施設への支援やワクチン接種と看護職員の負担が増大した。目標を可視化し評価をしやすくしながら連帯感を強め、多職種協働が功を奏しチーム医療・介護の実践ができ看護職員の負担軽減に繋がった内容が紹介された。

Web 上の Q&A 機能を活用しディスカッションが進んだ。

佐藤氏に関連したディスカッションでは看護職員配置の視点から 2 点。1 点目はリリーフ体制の抵抗感は、若干存在するが、病床稼働率だけで判断せず、重症度看護必要度・入退院患者数・看護職員の実人数の状況を加味して現場とのやりとりを大切にしている。気持ちよくリリーフ職員を出すとともに、リリーフを受けた病棟職員が感謝の気持ちを伝え合う働きかけも大切。2 点目は、育児短時間制度を活用する職員に対し外来配置をしていたが、モチベーションの維持やキャリアアップへのニーズ等から、昨年度病棟配置を導入した。部署によって育児短時間制度の職員を実習指導者に担当することで、実習時間と勤務時間がマッチング

していることや夜勤がなく毎日勤務であることから学生に対し大きな成果が得られた。また、特定看護師(特定行為研修修了者を称す)は現在 12 名で褥瘡関連の特定看護師 2 名は専従、他は部署配置で日々の高度看護の実践をしつつ、高度看護研修センターで特定行為研修期間中は実地指導者の役割を担っている。RRT・RRS は特定看護師や認定看護師、院内の認定看護師制度で学習した職員がチームメンバーになり、ローテーションしながらチーム活動日としている。インセンティブはないが、期待値が高くやりがい感につながっている。ただ、ストレスには看護管理者が適切に対応していると話された。

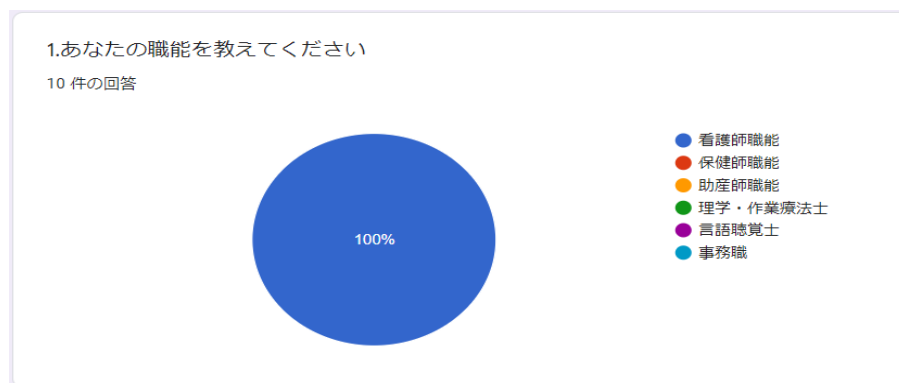
甲斐氏に関連したディスカッションでは多職種協働の視点から 2 点。1 点目は協働の実際で、小さな組織であることや大分市内の中心部からかなり離れた地域のため看護師不足は切迫した課題であり、看護業務の継続や看護の質の維持には多職種協働が何よりの解決策であることを会議や委員会の場で力説しつつ多職種からの理解を得「患者さんのために何をしたらよいか」を常に検討していること。2 点目はコロナ禍が終息した後も継続可能な取り組みで新人看護職員の教育にリハビリテーション職員やソーシャルワーカー職員の力を借りていきたいことや、外来待ち時間に「ミニミニ健康教室」を外来看護師中心に開催しているが、多職種で協働を考えている。また、勤務作成は、看護管理者の研修で学習するものの現場で職員の状況に流されてしまう現状があり、何が大切なのかを再検討した際、看護力の一定した確保や看護師の安全な環境づくりである思いからチェックリストが誕生し管理面から継続していることが話された。

認定看護管理者としての思いや管理観で、佐藤氏は看護職員らが自分たちの看護を見極め日々のケア提供ができることを第一としている。それには 1 人 1 人の職員的能力を見極められることや人を大事にする努力をしていること。甲斐氏は急性期病院から地域の病院に来た際に地域の看護師連携や、地域の中で看護師が中心的存在でありたいと感じた。その実現のために看護の質向上に寄与していきたい。具体的方法として PDCA サイクルを回していくことを大切にしている。そして地域の患者さんに「この地でよかった」と思ってもらえるような看護ケアの提供ができる職員を育てていきたい、と語った。

質問件数は多くあつという間のディスカッションだった。

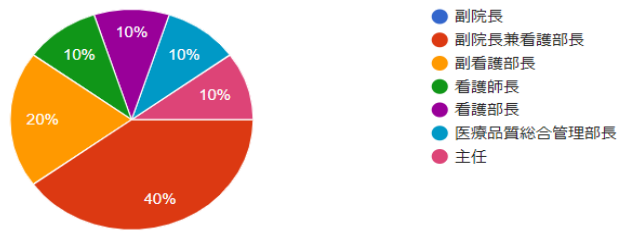
V. アンケート結果

N=10 (参加者 138 名、回収率 7.2%)



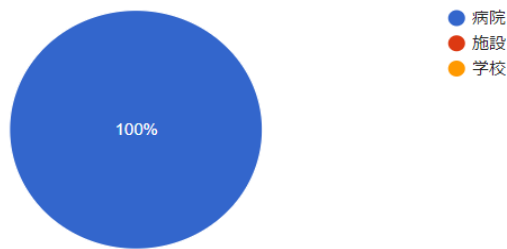
2.あなたの職位を教えてください

10 件の回答



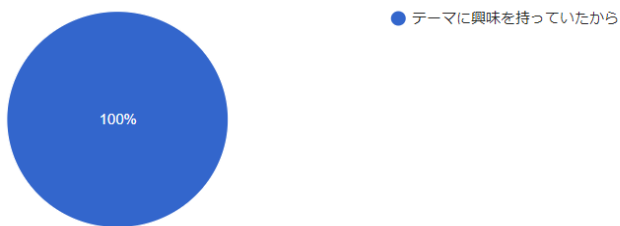
3.あなたの所属先を教えてください

10 件の回答



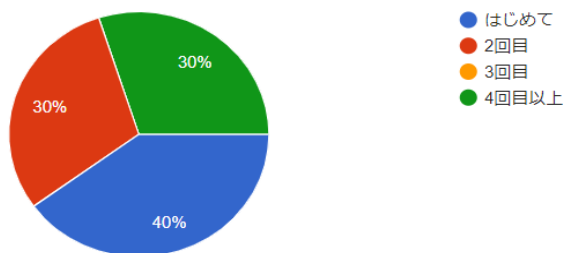
4.IE27の参加動機をお聞かせください

10 件の回答



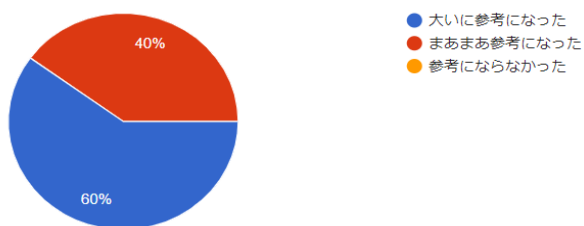
5.認定看護管理者会のIEへの参加は何回目ですか

10 件の回答



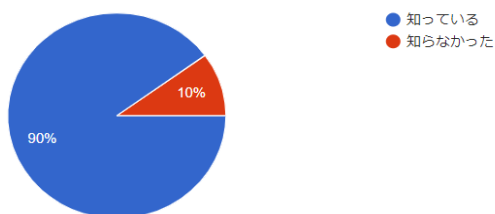
6.IEの内容はいかがでしたか

10件の回答



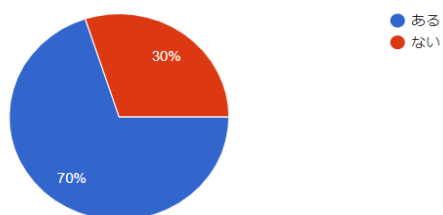
7.認定看護管理者会の入会にはサードレベル修了者であれば入会できることをご存じですか

10件の回答



8.認定看護管理者会のホームページを閲覧されたことはありますか

10件の回答



9. 今後のテーマなどご意見または課題などをご記入ください

- ・人材育成
- ・サードと修士の認定看護管理者の実践に違いがあるか？

VI. まとめ

津島準子常務理事は以下の様に総括した。コロナ禍で看護職員に求められる役割が多岐にわたること、しかも刻一刻それは変化し未来予測が困難な状況でも看護管理者には変化を受け入れ柔軟に対応することが大切であること。こうありたいという思い、リーダーシップのありようが、タスクシフト・タスクシェアを考える際に必要だと気付いた。まさに柔よく剛を制すである、と。

現地開催とLIVE配信で実施された学会であった。トラブルシューティング対応のため福地長田両副会長と澤邊財務理事が現地入りしタイムキーパー・チャット確認等が行われた。不慣れな中でも前回以上の参加者が募り無事に終了した。



話題提供者紹介
佐藤悦子氏(右)と甲斐清美氏



座長紹介
福地副会長(右)と長田副会長